

# 抄本「黒旋風雙獻功雜劇」訳注 (第一折)

林 雅 清  
蔡 麗 玲  
井 上 泰 山

## (凡例)

- ① 本稿は「黒旋風雙獻功」雜劇に校注と訳注を付したものである。
- ② テキストとしては「脈望館鈔校本古今雜劇」(商務印書館『古本戲曲叢刊』第五集)所収の抄本を用いた。
- ③ まず【原文】を掲出し、次に【訳文】(日本語訳)を配し、最後に【校注】を一括して載せた。
- ④ 【原文】の文字は、極力抄本の字体に忠実に表記した。なお、原文中の句読点および括弧等は訳注者による。
- ⑤ 【原文】・【訳文】とも曲文を太字で表記した。【原文】の曲文については、「襯字」でない文字に標点を付し、韻字の後を句点、それ以外を読点とした。なお、句形の判別には鄭騫撰『北曲新譜』(藝文印書館、1973)を参考にし、【校注】で押韻する句に「○」、押韻しない句に「×」、押韻してもしなくてもどちらでも良い句に「△」を付した。
- ⑥ 【校注】における校勘には『元曲選』本を用いたが、字体の相違やト書の表記の違い等、意味上大きな変化をもたらさない相違点について

は触れず、翻訳する際に特に必要と思われる箇所に【校注】を付した。

- ⑦ 【校注】において中国語の原文を引用する際には、欧文引用符号“ ”を用いた。
- ⑧ 本作品には王學奇主編『元曲選校注』（河北教育出版社，1994）、中国俗文学研究会会誌記録「『黒旋風』注釈」（『中国俗文学研究』3，1985）など、すでにいくつかの訳注があるが、これら既存の訳注において指摘されている語彙および市販の元曲語彙辞典の類に施注されている主な常用語については、基本的に注を付さないことにした。
- ⑨ 紙幅の制限上、今回は「第一折」のみを掲載する。「楔子」以降は次号以下に連載予定。なお、本稿は会誌による検討結果に基づき、「第一折」・「第三折」を林雅清が、「楔子」・「第二折」・「第四折」を蔡麗玲がそれぞれ担当して草稿を作成し、その後再び全員で検討を行う形式により作成した。

### 【原文】

#### 黒旋風雙獻功雜劇

頭折<sup>1)</sup>（冲末<sup>2)</sup>扮孫孔目，搥旦<sup>3)</sup>扮郭念兒同上）（孫孔目云）人道公門不可入，我道公門好脩行。若將曲直無顛倒，腳踏<sup>4)</sup>蓮花步步生。小生本靈<sup>5)</sup>人氏，姓孫名榮。渾家姓郭，是郭念兒。嫡親的<sup>6)</sup>兩口兒家屬。我在這衙門中，做着箇把筆司吏。我許了這泰安神州三年香願，今年第三年也，我這渾家要跟随將我去，爭奈小生平昔間軟弱，泰安神州謊子極多，哨子極廣，怎生得一個護臂跟随將我去方可。大嫂<sup>7)</sup>，你在家中安排下茶飯，我去長街市上尋一個護臂走一遭去。長街尋護臂，神州去燒香。渾家身無事，還家謝穹蒼<sup>8)</sup>。（下）（搥旦云）孔目<sup>9)</sup>，你尋了護臂，早些兒來<sup>10)</sup>，休着我憂心也！衙內性兒乖，把他叫將來。說些私情話，必定稱心懷<sup>11)</sup>。（下）（宋江同吳學究領小僕僮上）（宋江云）幼小為司吏，結識英雄輩。姓宋本名江，綽名順天呼保義<sup>12)</sup>。某姓宋名江，字公明，綽名順天呼保義<sup>13)</sup>。幼年曾為鄆州鄆城縣把筆

司吏，因帶酒殺了閻婆惜，脚踢翻蠟燭臺，沿<sup>14</sup>燒了官房，致傷了人命，被官軍捕盜捉拏的某緊，我自首到官<sup>15</sup>，脊杖六十，迭配江州牢城去。因打此梁山過，有我八拜交的哥哥晁蓋知某有難，領僕儼下山，將押解人打死，救某上山，就讓某第二把交椅坐。哥哥晁蓋，三打祝家庄身亡<sup>16</sup>，衆兄弟拜某為頭領。某聚三十六大夥，七十二小夥，半垓<sup>17</sup>末小僕儼，威鎮梁山<sup>18</sup>。寨名水滸，泊號梁山。縱橫河港一千條，四下方圓八百里，東連大海，西接濟陽<sup>19</sup>，南通巨野、金鄉<sup>20</sup>，北靠青、齊、兗、鄆。有七十二道深河港，屯數百隻戰艦艨艟，三十六座宴臺，聚百萬<sup>21</sup>軍糧馬草。聲傳宇宙，五千鐵騎敢爭先；名達天庭，聚三十六員英雄將<sup>22</sup>。風高敢放連天火，月黑提刀去殺人。我有個八拜交的哥哥<sup>23</sup>姓孫，是孫孔目，許下泰安神州燒香三年，燒了二年也。今年是第三年，問某討個護從的人。小僕儼，寨門首望者，若哥哥末時，報復某知道。（小僕儼云）理會的。（孫孔目上云）小生孫孔目的便是。我離了家中，我瞞着我渾家，則說街市上尋個護臂去。我這裡離梁山至近，宋江哥哥是我舊交的朋友，我問他討一個護臂去。可早末到也<sup>24</sup>。休放冷箭<sup>25</sup>！報復去道有孔目孫榮特末拜見哥哥末。（小僕儼云）理會的<sup>26</sup>。（報科云）喏，報的哥哥得知，有孔目孫榮末拜見哥哥末<sup>27</sup>。（宋江云）道有請。（小僕儼云）理會的。有請<sup>28</sup>。（孔目做見科云）哥哥，多時不見，受您兄弟兩拜。（宋江云）哥哥免禮。此一末莫非為討護臂麼？（孫孔目云）哥哥，我則為這三年香願，今年是第三年也。要將帶媳婦兒前去，那泰安神州謊子極多，哨子極廣，特末問哥哥這裡告一個護臂末。（宋江云）學究哥<sup>29</sup>，這庄<sup>30</sup>事難以點差。小僕儼，躋着山岡，傳着某的將令道，三十六大夥，七十二小夥，半垓末小僕儼，那一個好男子好漢保着孫孔目哥哥上泰安神州燒香去，可是有也是無？（小僕儼云）理會的。我出的這門末<sup>31</sup>。兀的三十六大夥，七十二小夥，半垓末小僕儼！那個好男子好漢跟着孫孔目上泰安神州燒香去，可是有也是無？（三科了）（正末扮李逵上云）有，有，有。我敢去，我敢去！

（正宮）【端正好】<sup>32</sup>者莫<sup>33</sup>待渡關河，登途逕。把哥哥直送上泰嶽山城。將

我這夾鋼斧綽清泉，觸石上摧摧的新磨擗<sup>34)</sup>。放心也，我和那合死的官軍併。

(正末云) 報復去道有山兒<sup>35)</sup> 李逵末了也。(小倭佻云) 理會的<sup>36)</sup>。喏，報的哥哥得知，有山兒李逵末了也。(宋江云) 着他過末。(小倭佻云) 理會的。過去<sup>37)</sup>。(正末做見科云) 宋江哥哥，喏。學究哥哥，喏。您<sup>38)</sup> 兄弟末了也。(宋江云) 兄弟也，有個客人在此，你和他厮見咱。(正末做見孔目科云) 您兄弟知道。客人，喏。(孫孔目驚科云) 是人也那是鬼？(宋江云) 哥哥休驚莫怕，則他是十三個<sup>39)</sup> 頭領山兒李逵，山惡人善也<sup>40)</sup>。

【滾繡毬】<sup>41)</sup> 我這里見客人，將我這禮數末迎。把我這兩隻手插定。哥也，他見我這威凜凜的身似碑亭。他也可慣聽。我這莽壯聲。誑他一箇癡擗<sup>42)</sup>。誑的他驚急力<sup>43)</sup> 的膽戰心驚。(帶云) 哥也，他不怕我別。(唱) 他見我這風吹眼欠<sup>44)</sup>，我這鼻凹裏黑，他見我這血漬得腌臢，呸，是我這納襖腥。審問個叮哼。

(宋江云) 山兒，這庄<sup>45)</sup> 事我可不曾點差你，可是你要去，你這個名字不好，誰不知你是李山兒？你更了名改了姓者。(正末云) 哥也，您兄弟去則去，我改了這名字者<sup>46)</sup>？(宋江云) 你改了者。(正末云) 我改做山兒者波。(宋江云) 誰不知你是山兒！(正末云) 改做李逵者波。(宋江云) 誰不知你是李逵！(正末云) 您兄弟老爺——老娘家姓王，改做王重義者波。(宋江云) 雖然更了名改了姓，你這般茜紅巾，猩<sup>47)</sup> 衲襖，乾紅褶膊<sup>48)</sup>，腿繃護膝，八荅麻鞋，恰便似那煙薰的子路，墨灑<sup>49)</sup> 的金剛，休道是白日里，夜晚間揣摸着你呵，也不是箇恰好的人<sup>50)</sup>。(正末云) 您兄弟打扮做庄家後生，可是如何？(宋江云) 這等便堪可去的。那得庄家的衣服末？(正末云) 有，有，有。您兄弟下的山去，在那官道傍邊，候在一壁掩映着。等那庄家過末，哥阿，衣服借與我使一使兒。那厮與我，萬事罷論。他但說箇不與，我一隻手揪住衣領，一隻手揩住脚腕，滴溜撲摔箇一字交。闊脚板踏着那厮胸膛，舉起我這夾鋼板斧末，覷着那厮嘴縫鼻凹恰待砍。哥阿，休道是衣服，那厮連鐵鋤也與您兄弟也<sup>51)</sup>。

【倘秀才】<sup>52)</sup> 我今日改換了山寨的醜名。我打扮做箇庄家後生。我着那捕盜

官軍摸不着我影。忒搗殺<sup>53)</sup>，好相爭。我和他鬪迎。

(宋江云) 山兒，泰安神州，天下英雄都在那里，你休與人厮推厮打，打家截道，殺人放火也。

【伴讀書】<sup>54)</sup> 泰安州雖無<sup>55)</sup> 那千千丈陷虎池，萬萬尺迷冤陣<sup>56)</sup>。我與你擺着手橫行，(帶云) 趨了<sup>57)</sup>。(唱) 若是<sup>58)</sup> 抹<sup>59)</sup> 着我的無乾淨。保護的俺哥哥不許生疾病。若我<sup>60)</sup> 失了軍情政<sup>61)</sup>。哥也，我便情願輸了燕頸<sup>62)</sup>。

<sup>63)</sup> (正末云) 哥也，您兄弟這一去，保護的哥哥無事無非還家未。若有些兒失錯呵，願輸我項上這顆頭<sup>64)</sup>。(宋江云) 兄弟，下山去則要你忍事饒人者。

(正末云) 哥也，假似有人罵你兄弟呵呢？<sup>65)</sup> (宋江云) 忍了。(正末云) 有人唾在你兄弟臉上呵呢？(宋江云) 揩了<sup>66)</sup>。(正末云) 有人打你兄弟呵呢？

(宋江云) 你少還他些兒。(正末云) 還他這些兒？(宋江云) 少。(正末云) 還他這些兒？(宋江云) 少。(正末云) 還到這里，怕做什麼！<sup>67)</sup> (宋江云) 可打殺人也！則要你輕道重德，兄弟也，是和非休爭競<sup>68)</sup>。

【耍孩兒】<sup>69)</sup> 是和非誰共你閑爭競。假若是買物件，多共少我和他分毫也那<sup>70)</sup> 不爭。若有那醉漢每罵我一千場。(正末云) 哥也，你罵的是<sup>71)</sup>。(唱) 我則<sup>71)</sup> 索忙陪笑臉兒相迎。那厮他口中殘唾望着我這鼻凹裏噴，那厮鼻內的腌臢<sup>72)</sup>，(正末云) 沒也！哥也！(唱) 他望着他這臉上擗<sup>73)</sup>。誰共他閑爭競。(正末云) 我和哥哥半步兒不敢厮離也。(宋江云) 假似哥哥上馬蹏呵。(唱) 上馬蹏與哥哥擎鞭墜鐙。(宋江云) 哥哥喫酒蹏呵呢？(唱) 喫酒蹏與哥哥綽鏃提瓶。

(宋江云) 兄弟也，便好道：“恭敬不如從命”也。

【哨篇】<sup>74)</sup> 恭敬不如從命。我便可既蒙俺箇哥哥令。若有人把哥哥厮欺負，我和他兩白日便見那簸箕星<sup>75)</sup>。則我這兩條臂，攔闕扶碑，則我這兩隻手，我可敢直鉤<sup>76)</sup> 缺了。理會的山兒情性。我從未路見不平。爰與人當道搬坑<sup>77)</sup>。我喝一聲骨都都江海沸，撼一撼赤力力山嶽崩。世惱犯我咱情性。千方百計<sup>78)</sup>，翻過未做一箇可<sup>79)</sup> 吊盤的煎餅。

(宋江云) 便好道：“弓硬絃長斷，剛強惹禍殃”<sup>80)</sup>。你若保着孫孔目回未時，

我自有重賞。小心在意，則要你忍事饒人者。(正末云) 哥哥你放心也。

【尾聲】<sup>81)</sup> 我去呵，一隻手攬住<sup>82)</sup> 巔峯。揪住村俏領<sup>83)</sup>。泰安州主張的我身周正。我可敢搬倒了那差我，(帶云) 放心也，哥！(唱) 那一座泰山頂。

(同孫孔目下)(宋江云) 孫孔目去了也。學究哥，無甚事，啗後山中飲酒去來。衆小校聽某分付，今日箇諛您巡捕。伏路處悄語低言，不要您語笑喧呼。人人要擐甲披袍，箇箇要開弓登弩。逡巡間違了將令，斬首級決無輕怒<sup>84)</sup>。(同下)

### 【訳文】

#### 第一折

(沖末が孫孔目に扮し、搥旦が郭念児に扮して共に登場)(孫孔目せりふ) 役所にゃ行くなと皆いうが、役所は修行にもってこい。曲直違えることなくば、極楽浄土に歩いてゆける。私はこの在所の生まれで、姓は孫、名は榮と申します。家内は郭、郭念児と申し、家族といえは、水入らずの二人きりでございます。いま私は、役所にて文書係を務めております。さて、私は泰安神州にて三年の願掛けをしておりまして、今年がその三年目に当たります。そこへ家内もついて行きたいと申すのですが、いかんせん私は腕に覚えもなく、泰安神州にはいかさま師やごろつきの類が大勢おりますので、なんとかして用心棒を雇い、一緒に行ってもらわねばなりません。念児や、おまえは家で飯の仕度をしておいておくれ。私は街へ出てちょっと用心棒を探してくるよ。街で用心棒探し、泰安神州へお参りに。家内が無事に帰れたならば、天に感謝いたします。(退場)(搥旦せりふ) だんなさま、用心棒を見つけられたらすぐに戻ってきてくださいね。わたくし心配ですから。衙内さまはかしこいお方、お呼びして、内緒の話をいたしましょう。そうすれば、必ず心にかなうはず。(退場)(宋江が呉学究とともに手下を連れて登場)(宋江せりふ) 年若くして司吏となり、英雄たちと交われり。姓は宋にて名は江という、綽名は順天の呼保義。それがし姓は

宋、名は江、字を公明、綽名は順天呼保義と申します。若い頃、鄆州鄆城県の文書係をしておりましたが、酒に酔って閻婆惜を殺めてしまい、燭台を蹴倒したことにより官舎まで延焼してしまったのです。人の命を奪ったかどで、お上の捕り方の手が厳しくなるとまいり、それがし自ら出頭いたしました。そして、背中に棒打ち六十を受け、江州の牢城に配流されることとなりましたが、ここ梁山を通ったことにより、義兄弟の晁蓋兄貴がそれがしの危急を知って手下を引き連れ山を下り、護送役人を殺してそれがしを救い出してくれました。そして、山に登るとそれがしに第二の席を与えてくれたのです。しかし、晁蓋兄貴は祝家莊を三たび攻めたときに命を落とされ、兄弟たちはそれがしを頭領に押したのです。そこでそれがし、三十六人の大頭目、七十二人の小頭目、あまたの子分どもを集め、威をもって梁山を治めました。<sup>とりで</sup>寨の名は水滸、<sup>みずうみ</sup>泊の名は梁山、縦横に千本の河が流れており、それが四方八百里に広がっております。東は海に注ぎ、西は済水に繋がり、南は鉅野・金郷に通じ、北は青州・齊州・兗州・鄆州に至っております。そのうちの七十二本の深い河には、数百艘もの<sup>いくさぶね</sup>軍船が停泊しており、三十六箇所の宴台には、百万の兵糧と干草を集めております。名声は天下に轟き、五千の鉄騎が先を争う勢いで、威名は天まで達し、三十六人の英雄たる將軍が集まっております。風が起これば天まで焦がす火を放ち、月が隠れれば刀を持って人を殺しに行きましょう。さて、それがしには義兄弟の契りを交わした孫兄弟、すなわち孫孔目がおりますが、泰安神州へ三年の願掛けに行く約束をして二年が過ぎ、今年で三年目になるとのこと。そこでそれがしに用心棒を世話してくれと言ってきました。ものども、<sup>とりで</sup>寨の門を見張っている。孔目どのがやって来たらすぐに知らせるのだ。(手下せりふ) わかりやした。(孫孔目が登場してせりふ) 孔目の孫でございます。私は家を出る時、家内に嘘を申して参りました。街に用心棒を探しに行くと伝えましたが、ここは梁山泊から近いことですし、宋江兄者は私の古くからの友人ですので、兄者に用心棒をお世話してもらおうこ

とにしました。早くも着いたぞ。やみくもに矢を射かけないでくれ。孔目の孫栄が兄者に会いに来たと伝えておくれ。(手下せりふ) わかりやした。(報告するしぐさをしてせりふ) 頭領、ご報告いたしやす。孔目の孫栄さんが頭領にお目通りに来やした。(宋江せりふ) 入ってもらおうように。(手下せりふ) へい。どうぞ。(孔目が見えるしぐさをしてせりふ) 兄者、お久しぶりです。どうか私の挨拶をお受けください。(宋江せりふ) よしてくだされ孔目どの。このたびは用心棒をお探しかな。(孫孔目せりふ) 兄者、私は三年の願掛けをしており、今年がその三年目なのです。家内を連れて行くことになったのですが、泰安神州にはいかさま師やごろつきどもが大勢おりますので、特に兄者の所で用心棒を一人つけてもらおうと、やって来たわけです。(宋江せりふ) 学究先生、今回誰を遣わすか、難しいですな。お前たち、山を巡って私の命令を伝えよ。「三十六人の大頭目に七十二人の小頭目、そしてあまたの子分たちよ、誰か孫孔目をお守りして泰安神州へお参りに行くのに供をする好漢はおらぬか」と。(手下せりふ) へい、わかりやした。さて表へ出たぞ。そこなる三十六人の大頭目に七十二人の小頭目、そしてあまたの子分たちよ、誰か孫孔目につき従って泰安神州へお参りに行くのにお供をする好漢はおらぬか。(三たび言い終えると、正末が李逵に扮して登場し、せりふ) おう、おう、おう。おいらが行く、おいらが行く。

(正宮)【端正好】たとえ山越え河渡ろうと、兄貴をば、泰嶽山へまっすぐ。おいらの鋼の斧は今しがた、清水と砥石でしゅっしゅっと、磨いたばかりだ、心配ねえ、くそったれの官軍なんぞ蹴散らしてくれる。

(正末せりふ) 山児の李逵が来たといえ。(手下せりふ) へい。頭領、報告いたしやす。山児の李逵が参りやした。(宋江せりふ) 通せ。(手下せりふ) へい。お入りを。(正末が見えるしぐさをしてせりふ) 宋江の兄貴、学究先生、ご機嫌よう。弟李逵が参りやした。(宋江せりふ) 兄弟よ、お客人だ、ご挨拶しろ。(正末が孔目に見えるしぐさをしてせりふ) 合点で。



お客人、ようこそ。(孫孔目が驚くしぐさをしてせりふ) あれは人か、それとも化け物か。(宋江せりふ) 孔目どの、怖がらずともよろしい。これは十三番目の頭目、山児の李逵と申して、見た目は悪いが人はいいのです。

【滾繡毬】おいらでも、お客人には礼儀正しくお迎えしよう。こうして両手を合わせるぞ。宋兄貴、あの客人はおいらの堂々たる、<sup>いしぶみ</sup>碑のごとき体軀を見た上おいらのよ、おっかねえ声聞き慣れねえんでおったまげ、肝をつぶして震えてら。(いれぜりふ) 兄貴、お客人はおいらの他のところを怖がっているんじゃないよ。(うた) 客人は、風に吹かれた鼻の穴、おいらの真っ黒な鼻の穴、この血まみれの薄汚い、ちえっ、真っ赤な上着を見たもんで、あれやこれやとお尋ねなさる。

(宋江せりふ) 山児よ、今回はお前を名指ししたわけではないが、お前が行くというなら、お前のその名は良くない。李山児という名を知らぬ者がおろうか。名前を変えていきなさい。(正末せりふ) 兄貴、おいら行くにゃあ行くけどよ、名前を変えろってのかい。(宋江せりふ) 変えなさい。(正末せりふ) じゃあ山児に変えやしょう。(宋江せりふ) お前が山児だということを知らぬ者がおろうか。(正末せりふ) なら李逵にしやす。(宋江せりふ) お前が李逵だということを知らぬ者がおろうか。(正末せりふ) それなら、おいらのおとうは……いやおっかあんちは王ってんで、王重義という名にしやすぜ。(宋江せりふ) 名前は変えても、お前のその真っ赤な頭巾と上着、赤いしごき帯に脚絆、八つ耳の麻草履、まったく黒くすすけた子路のような、墨みたいに黒い金剛力士のような風体では、昼間は言うまでもなく、夜出くわしても、ふさわしいとは言えんな。(正末せりふ) おいらは百姓の若者になりやすぜ。どうでしょう。(宋江せりふ) それならまあ行ってもよかろう。ところで、百姓の服はどうやって手に入れる。(正末せりふ) おやすいご用で。おいらは山を下り、あの街道の傍らに身を潜め、百姓がやって来るのを待って、だんな、着物を貸しておくれよ。そいつが貸してくれりゃいいが、一言でも嫌だと言うてみな、おいらは片

方の手でその襟首を引つつかみ、もう片方の手で奴の脚をつかんで、そのままずでんと投げ飛ばして一文字にのしてやり、このでっかい足で奴の胸ぐらを踏んづけて、鋼の斧を振り上げ、奴の顔面めがけて振り下ろそうとすりゃ、そいつは着物ばかりか、鋤までおいらにくれるだろうよ。

【倘秀才】このおいら、いま山寨の悪名を、改めてから百姓の、せがれに扮して行きやしょう。あの役人を煙に巻き、凶悪で、争い好きのおいらがよ、奴の相手をしてやるぜ。

(宋江せりふ) 山兎よ、泰安神州は天下の英雄が集まるところだ。お前は人と喧嘩をしたり、押込みや追剥をしたり、火を付けたり人を殺めたりしてはならぬぞ。

【伴読書】泰安州とて虎陥れる幾千丈もの池もなければ、魂惑わす幾万尺もの陣あるわけなし。このおいら、大手を振って堂々と、まかり通ってやりやしょう。(いれせりふ) おらどいた。(うた) もしもおいらに近づく奴がいたならば、きっとただでは済まさんぞ。兄貴をお守りするからにゃ、病とても寄せつけぬ。もしも軍律破ったならば、宋兄貴、おいらのそっくび差し上げやしょう。

(正末せりふ) 兄貴、今回おいらが行くからにゃ、孫の兄貴を間違いなく無事に帰るまでお守りしやす。もしも少しでも間違いがあろうもんなら、おいらのこの首を差し出しやしょう。(宋江せりふ) 兄弟よ、山を下りたら何事にも堪忍するのだぞ。(正末せりふ) 兄貴、それじゃもし誰かがおいらを罵ったら？(宋江せりふ) 堪えよ。(正末せりふ) じゃあ顔に唾を吐きかけられたら？(宋江せりふ) 拭いなさい。(正末せりふ) 誰かに殴られたら？(宋江せりふ) 少しだけ仕返しをしてやりなさい。(正末せりふ) これくらいで？(宋江せりふ) まだまだ。(正末せりふ) これくらいで？(宋江せりふ) もう少し。(正末せりふ) これくらいできるなら、何にも怖いもんはねえ！(宋江せりふ) わたしを殺すつもりか！くれぐれも道理をわきまえ穩便にな。兄弟よ、是非を争ってはならぬぞ。

【耍孩兒】是非なんぞ、誰がいたずらに争いやしよう。物を買ひ、たとえ多かろうと少なかりと、争う気なぞみじんもねえ。酔っ払いどもがこのおいらを、もしも散々罵ろうとも、(正末せりふ) 兄さんの言い分ごもつともで。(うた) 慌ててお追従笑いをしてやるぜ。やつがよだれをおいらのよ、顔にひっかけようとしても、やつの汚い鼻水を、(正末せりふ) そりゃねえよ、兄さん。(うた) おいらの顔にひっかけようとしたってよ、つまらん争いなんぞしやせん。(正末せりふ) おいらは孫の兄貴から一步たりとも離れやせん。(宋江せりふ) 孔目どのが馬に乗るときはどうする。(うた) 馬に乗るときゃ鞭を執り、<sup>あぶみ</sup> 鐙を垂らして進ぜよう。(宋江せりふ) 孔目どのが酒を飲むときは。(うた) 酒を飲むときゃお爛して、徳利捧げて進ぜよう。

(宋江せりふ) 兄弟よ、よく言うではないか、へいこらすより命令どおりに実行せよと。

【哨篇】へいこらすより命令どおりに実行するぜ。兄貴の命を奉じたからにゃ、もし孫兄貴に手を出す輩がいたならば、このおいら、そやつをただでは済まさんぞ。おいらの両の腕にゃ関を止め、<sup>いしぶみ</sup> 碑もたげる力あり、手の指にゃ、<sup>かぎ</sup> 鉤を伸ばして釘っこ曲げる力ある。山児の性分ご存知か、不義見りゃ道掘る義侠心。このおいら、一喝すればどどうと波立つ海に河、身震いすればどどうと音立て山崩る。おいらをよ、もしも怒らせようもんなら、あの手この手で痛めつけ、煎餅みたいののしてやる。

(宋江せりふ) 柳に雪折れなし、柔能く剛を制すと言うであろう。お前がもし孫孔目を無事連れ帰ったときには、たっぷり褒美を取らせよう。何事にも堪えて人を許すということ、忘れてはならぬぞ。(正末せりふ) 兄貴、安心しておくれ。

【尾声】出かけたなら、片手で危ない峰押さえ、やばな山をば掴んでいやしよう。泰安州に行ったなら、身を慎むと誓いやしよう。おいらは決してあの靈峰を、引き倒すような真似はしやせん。(いれぜりふ) 安心しておく

れよ兄貴。(うた) あの泰山を。

(孫孔目とともに退場) (宋江せりふ) 孫孔目どのは行ってしまわれた。学究先生、やる事もなくなりましたし、我われは山に戻って酒でも飲みましょう。ものども、よく聴け。今日はお前たちが見回りをし、ひそんでいる間は声を上げてはならぬ。談笑は許さぬぞ。各々甲冑を身につけ、弓矢を執るのだ。いささかなりとも命に背けば斬首、決して許すことはないと心得よ。(全員退場)

### 【校注】

- 1) “頭折”：『元曲選』本では“第一折”となっている。よって、今回表題および訳文では便宜上「第一折」と表記した。なお、『元曲選』本では“第一折”の前に“元高文秀撰 明吳興臧晉叔校”という表記がある。
- 2) “冲末”：男性の脇役とも考えられるが、元曲では主役である“正末”と同じ役者が演じることもあり、脚色名とするには問題がある。詳しくは、齋藤(日下)翠「「正末」「正旦」考」(『日本中國學會報』第二十五集, 1973)、小松謙「元雜劇の開場について」(『中國文學報』38, 1987)等参照。なお、今回は「冲末」という言葉をそのまま用いて訳した。
- 3) “搽旦”：女性の脇役、悪女であることが多い。詳しくは、井上泰山「元雜劇の「搽旦」について」(『中国俗文学研究』第一号, 1983)参照。
- 4) “躑”：“踏”の俗字(あるいは抄者の書き癖)、「躑」ではない。なお、『元曲選』本では“踏”に作る。以下同じ。
- 5) “本窟”：『元曲選』本では“鄆城縣”となっており、鄆城県出身の宋江との繋がりが示唆されている。また、地名を記すことにより梁山泊および泰山との地理的關係が明確になっている。
- 6) “嫡親的”：“嫡親”は元來肉親のこと。夫婦は血が繋がっていないが、「血の繋がった者のように親しい」ということから、この表現を用いることが多い。
- 7) “大嫂”：妻に対する呼びかけ。日本語では夫婦間における呼びかけに親族名称や役職名を用いることは稀である(子供の視点から呼ぶ「お父さん」・「お母さん」は除く)。よって、「念兒や」と訳した。
- 8) “長街……”：『元曲選』本ではこの詩はない。なお、“長街”は都市の主要な道路・大通りという意味であるが、ここでは大通りのある所、すなわち

「街」と訳した。前の“長街市”も同様。

- 9) “孔目”：注7と同様の理由により、「だんなさま」と訳した。
- 10) “末”：“來”の異体字。「来」（すき）ではない。
- 11) “衙内……”：この独白の退場詩によって、郭念兒が白衙内と浮気していることが示唆されている。なお、『元曲選』本では、この詩の前に“這裏也無人，我心上只想着那白衙内。和他有些不伶俐的勾當，我已央人叫他去了，只等來時，自有說話”という独白のせりふが入っており、不倫の事実がより明確にされている。
- 12) “幼小……”：この詩、『元曲選』本では“家住梁山泊，平生不種田。刀磨風刃快，斧蘸月痕圓。強劫機謀廣，潛偷膽力全。弟兄三十六，個個敢爭先”となっている。
- 13) “綽名順天呼保義”：『元曲選』本では“綽號及時雨者是也”となっている。「呼保義」・「及時雨」ともに宋江の綽名であるが、『元曲選』本で“及時雨”に改められている理由としては、直前の登場詩の“呼保義”との重複を嫌ったためと考えられる。
- 14) “沿”：“延”の意。音通によって代用されたものと考えられる。
- 15) “脚踢翻蠟燭臺……我自首到官”：この箇所、『元曲選』本では省かれており、ただ“被告到官”とあるのみである。なお、小説『水滸傳』では、宋江が閻婆惜を殺めたのは酒に酔ってではなく、官舎を延焼させたりしていない。しかし、元曲においては、「同樂院燕青搏魚雜劇」でも同様の表現がなされている。また、「梁山泊黒旋風負荊雜劇」，「大婦小妻環牢末雜劇」，「魯智深喜賞黄花峪雜劇」，「黒旋風仗義疎財雜劇」なども、官舎を延焼したという表現はないが、酒に酔って閻婆惜を殺したということになっている。かつ、「同樂院燕青搏魚雜劇」，「大婦小妻環牢末雜劇」，「黒旋風仗義疎財雜劇」の三劇では閻婆惜は遊女（“娼人”，“娼妓”，“匪妓”）ということになっている。
- 16) “哥哥晁蓋，三打祝家庄身亡”：『水滸傳』では晁蓋が死ぬのは曾頭市を攻めたときであるが、元曲では前注で挙げた劇すべてにおいて、祝家庄を三度目に攻めたときとなっている。
- 17) “半垓”：“垓”は中国古代の数の位で、億の千倍あるいは十京であるという。『元曲釋詞』では「“垓”は一億なので“半垓”は五千万になるが、普通数の非常に多いことを表す」としている。しかし、そこに引いている応劭の『風俗通』では、「十兆之を經と謂い，十經之を垓と謂う」とあり，“垓”は百兆に相当することになる。現在の単位では、垓は京の一万倍、すなわち十の二十乗を指す（『塵劫記』）。いずれにせよ、ここでは数の多いことを表し

ている。

- 18) “威鎮梁山”：『元曲選』本には無い。
- 19) “濟陽”：“東連大海”との関連で、「濟水の北」と解釈した。ただ、実際の濟水は梁山泊から北に延び、北東に流れを変えて渤海に注ぐため、地理的に合わない。また、「濟陽」という地名も齊州（現在の済南市）の北東に存在するが、これも実際の地理には符合しない。
- 20) “巨野”・“金郷”：ともに濟州（現在の済寧市西部）にある地名。
- 21) “百萬”：『元曲選』本は“幾千家”に作る。
- 22) “聲傳宇宙……”：この一文、『元曲選』本には無い。
- 23) “哥哥”：孫孔目も宋江を“哥哥”と呼んでいる。宋江は孫孔目よりも目上にあたると考え、「兄弟」（「弟」の意）或いは「孔目どの」と訳した。なお、『元曲選』本は“兄弟”に作る。以下同様。
- 24) “可早来到也”：舞台上の時間・空間の変化を表現するために用いられる定型の独白。このせりふの前に、しばらく道行のしぐさが入ると考えられる。
- 25) “休放冷箭”：“冷箭”は不意に射られる矢のこと。そこから転じて“放冷箭”を「闇討ちする」または「中傷する」という意味で用いることもあるが、ここはそうではない。
- 26) “理會的”：『元曲選』本にはこのせりふは無い。
- 27) “末拜見哥哥末”：『元曲選』本では“到此求見”となっている。
- 28) “理會的。有請”：“理會的”は宋江に，“有請”は孫孔目に対して発するせりふであるため、両せりふの間に一定の間（ま）が取られて手下が移動するか，“有請”が外に向かって大きく呼び込むせりふとして演出されるはずである。なお、『元曲選』本では“理會的”は無く，“有請”は“請進”に作る。
- 29) “哥”：『元曲選』本は“兄弟”に作る。
- 30) “庄”：音通による“椿”の代用字と考えられる。『元曲選』本では“椿”に作る。
- 31) “我出的這門末”：注24に同じ。
- 32) 【端正好】：五句… 3 △ 3 ○ 7 ○ 7 ○ 5 ○
- 33) “者莫”：「たとえ～でも」の意。『元曲選』本では“遮莫”に作る。ほか、“者末”“者麼”“者磨”“折莫”“折末”“折麼”などにも作る。
- 34) “掙”：字形の類似による誤字。『元曲選』本は“淨”に作る。
- 35) “山兒”：元曲における李逵のあだ名の一つであるが、『水滸傳』では使われていない。
- 36) “理會的”：ト書は無いが、このせりふの後にも移動するしぐさが入ると考

- えられる。なお、『元曲選』本ではこのせりふは無い。
- 37) “理會的。過去”：注36に同じ。なお、『元曲選』本では“理會的”が無く、“過去”の前に使役を表す“着”が入っている。
- 38) “您”：『元曲選』本は“你”に作る。宋江に対する李逵のせりふでは“您”と“你”が併用されているが、“您(你)兄弟”の場合は“您”が用いられる頻度が高い。なお、『元曲選』本(第一折)で“您”が用いられているのは、【伴讀書】と【笑和尚】の後のせりふにおける二例のみである。
- 39) “十三個”：「十三番目の」という意。『元曲選』本では“第十三個”に作る。
- 40) “山悪人善也”：「山は悪いが人は善い」とは「梁山泊は悪とされているが、ここに暮らす人はみな良い人ばかりだ」という意味か。しかし、『元曲選』では“這人相貌難惡，心是善的”(こやつ見た目は醜いが、心根はいいやつなのです)となっているため、これを参考に“山”を“山兇”(=李逵)の意で訳出した。
- 41) 【滾繡毬】：十一句… 3△3○7(4)○7○3△3○7(4)○7○7△7○4○
- 42) “癡掙”：「呆気にとられる」という意。“掙”は“争”“諍”“筋”にも作る。
- 43) “驚急力”：慌てふためく様子を表す擬態語。『元曲選』本では“荊棘律”に作る。ほか、同義の擬態語としては、“驚急列”“驚急烈”“驚吉利”“驚急里”“急驚列”“慌急列”“荊棘列”“荊棘刺”などにも作る。
- 44) “眼欠”：“眼”は“鼻眼”(鼻)の意，“欠”は「吹き抜けの穴」の意か。『元曲選』本では“風吹的齷齪”となっている。
- 45) “庄”：注30に同じ。
- 46) “我改了這名字者”：『元曲選』本では“要改這名字怎的”(なんでこの名を変えなきゃならねえんで?)となっている。
- 47) “猩”：先の【滾繡毬】の曲文における“納襖腥”の“腥”と同義。音通および字形の類似による誤字。なお、『元曲選』本では“腥”に作る。
- 48) “膊”：字形の類似による誤字。『元曲選』本では“膊”に作る。
- 49) “墨灑”：「墨を流したような」という意か。『元曲選』本は“墨染”に作る。
- 50) “休道是白日裏，夜晚間揣摸着你呵，也不是箇恰好的人”：「(李逵の恐ろしい風体では、) 明るい昼間はもとより、暗くてよく見えない夜間でも李逵だとすぐ分かるので、やはりふさわしくない」という意であろう。なお、“恰好的人”は『元曲選』本では「好人」となっている。
- 51) “您兄弟下的山去……”：この箇所は、李逵がせりふを言いながら実際に百姓から着物を巻き上げるしぐさを、一人芝居で演じていると考えられる。

“哥阿”は架空の相手役（百姓）に対する呼びかけの言葉。

- 52) 【倘秀才】：六句…7○7○7○3△3○2○
- 53) “搦殺”：「勇敢・獍猛」の意。ほかに，“搦扎”“調札”などにも作る。
- 54) 【伴讀書】：六句…5△5○7○7○7○4○
- 55) “雖無”：『元曲選』本は“便有”に作る。
- 56) “迷竄陣”：『元曲選』本は“牢龍阱”に作る。
- 57) “趨了”：注51に同じく，一人芝居を演じながらのせりふである。
- 58) “若是”：『元曲選』本は“管教他”に作る。
- 59) “抹”：「近づく・ぶつかる」の意。“驀”にも作る。
- 60) “我”：『元曲選』本では無く，“是有差遲”という言葉が入っている。
- 61) “軍情政”：『元曲選』本は“軍中令”に作る。
- 62) “輸了燕頸”：『元曲選』本では“納下一紙兒軍狀爲憑”となっている。
- 63) 『元曲選』本ではここに“(宋江云) 山兒，你要寫文書最好。只是你輸着什麼？”というせりふが入っている。
- 64) “我頂上這顆頭”：『元曲選』本では，これが“三兩銀子”となっており，その後以下のやり取りと一曲が挿入されている。
- “(宋江云) 這箇少哩！(正末云) 哦，我再做箇東道，請你那一班落保的都吃一個爛醉何如？(宋江云) 也還少哩。(正末云) 罷，罷，罷。我情願輸了這六陽魁首。(唱)
- 【笑和尚】**你，你，你道我調着嘴不志誠。我，我，我打着手多承領。管，管，管他壯着膽無倭倖。倘，倘，倘若是到泰安州敗了興。敢，敢，敢指梁山誓不回程。來，來，來，我情願輸了我吃飯的這一顆頭和頸。”
- 65) “假似有人罵你兄弟呵呢……”：以下“可打殺人也”まで，宋江と李逵による滑稽寸劇が展開される。罵られても堪え，唾を吐きかけられてもただ拭うだけ，であれば，殴られても我慢せよとなるはずであるが，そこで宋江が仕返しを許可するところに可笑しさがある。そして，調子付いた李逵が仕返しする度合いを聞くのであるが，三度目のせりふには（宋江に対して）明らかに相手を殺してしまうような相当大げさなしぐさを伴うと考えられる。同様のせりふ・しぐさを三度繰り返す，その三度目で笑いを取るという手法は，元曲における常套である。なお，最後の宋江のせりふ“可打殺人也”は，『元曲選』本では“可不打殺人也”となっているが，意味は同じである。
- 66) “措了……”：『元曲選』本では，このせりふと次の正末のせりふは無く，そのまま“你也還他些兒”という宋江のせりふが続く。
- 67) 『元曲選』本ではここに“做打拳科”というト書が入り，この場面の演出



がよりわかりやすくされている。注65参照。

- 68) “則要你……”：“輕道重德”，不詳。「好漢の任俠道はひとまず置いておいて，儒学で言うところの徳を重視せよ」という意か。この一文、『元曲選』本では，“則要你把是和是非少争競些兒纔好”となっており“輕道重德”という語はない。なお，最後の“競”は“競”。以下同じ。
- 69) 【耍孩兒】：九句…7○6○7△6○7△7○3△4△4○（この曲牌は「般涉調」に含まれる）
- 70) “哥也，你罵的是”：注51に準ずる。したがって，この“哥也”は架空の「酔っ払い」に対する呼びかけである。次のいれぜりふも同様。
- 71) “則”：“只”の意。『元曲選』本では“只”に作る。
- 72) “那厮他口中殘唾望着我這鼻凹裏噴，那厮鼻內的腌臢”：『元曲選』本では“那厮鼻中殘涕望着我這耳根邊噴，那厮口内頑涎望着我面上零。”となっており，【耍孩兒】の後半部分以降には，以下のように新たなうたとせりふが挿入されている。

“再不和他親折證。我只是吞聲忍氣，匿跡潜形。

（宋江云）那泰安山神州廟，有一等打擦臺賭本事的，要與人厮打。你見他山棚上擺着許多利物，只怕你忍不過，就要厮打起來，也不見得。（正末唱）

【一煞】有那等打擦臺使會能。擺山棚博個贏。占場兒沒一個敢和他争施逞。拳打的南山猛虎難藏隱。脚踢的北海蛟龍怎住停。我也只緊閉口不放些兒硬。我只做沒些本領。再不應承。

（宋江云）如今你怎生打扮去纔好？（正末唱）

【二煞】我將烟籠帽遮了眼睛。粗布帛縛了腿脛。着誰人識破我喬行徑。（宋江云）孫孔目哥哥到那山上要點燭燒香，回錢了願，都是你與他當值來。（正末唱）他上山時我與他備點燭燒香的事，下山時我與他供回錢了願的情。一步步跟隨竟。（宋江云）假似哥哥上馬呵？（正末唱）上馬處就與他執鞭墜銜。（宋江云）假似哥哥吃酒呵？（正末唱）吃酒處就與他綽鐵提觥。

（宋江云）那一個孫大嫂，可也生得大有顏色，只怕那一夥閒漢跟着他走，不好意思。（正末唱）

【三煞】那大嫂年又青。貌又整。則被他一班兒惡少相纏定。似這等天寬地蕩的清平世，怎容得女縱男淫潑賤精。觸犯我真無幸。請大嫂輕輕移步，和哥哥慢慢同行。”

- 73) “他望着他這臉上擗”：二番目の“他”は“我”の誤り。
- 74) 【哨篇】：十六句…6△7○7(5)△7○3△4△4△5○6△4×4○7△7○4△4×4○（この曲牌は「般涉調」に含まれる）

- 75) “白日便見那簸箕星”：「昼間にほうき星が見える」，すなわち「不吉なことが起こる」という意。ここでは李逵が「相手にとって不吉なことを起こしてやる」という意を表している。
- 76) “鈞”：『元曲選』本では“釣”に作っているが，誤字であろう。
- 77) “爰與人當道掘坑”：「人のために道を掘る」とは，「でこぼこ道を掘って平らにしてあげる」という意。
- 78) “世惱犯我咱情性。千方百計”：『元曲選』本では“但惱着我黑臉的爹爹，和他做場的歹鬪”となっている。なお，この“世”は“終”（ついに）の意。“是”“勢”にも作る。
- 79) “做一箇可”：『元曲選』本では“落可便”に作る。『詩詞曲語辭匯積』によると，“落可便”は“可便”と同じく意味のない襯字であるとされている。
- 80) “弓硬絃長断，剛強惹禍殃”：「弓が硬いと切れやすく，刃が硬すぎてはかえって禍を招く」という意であるが，日本語のことわざを用いて「柳に雪折れなし，柔能く剛を制す」と訳した。なお，『元曲選』本では後半を“人強禍必隨”に作る。
- 81) 【尾聲】：四句…5×5○7○7○（第一句は本来押韻しないが，この曲では押韻している。なお，『元曲選』本では曲牌が【煞尾】となっている）
- 82) “一隻手攬住”：『元曲選』本では“兩隻手忙揪住”に作る。
- 83) “揪住村僧領”：“僧領”は，音通および字形の類似による“峭嶺”の誤字であろう。『元曲選』本では，“兩隻脚牢踏住村峭嶺”に作る。
- 84) “孫孔目去了也……”：『元曲選』本ではこの宋江のせりふは無く，代わりに呉學究・宋江・兵卒による以下のようなやり取りが挿入され，第四折におけるプロットの変化への伏線となっている。なお，最後の“怒”は“恕”。抄本における書き癖として，「又」と「口」は相通ずる。本折冒頭の宋江のせりふ“捉拏”（注15に相当）の“拏”の右上部は「口」であるが，第三折に見える同字は“拏”に作っている。
- “（吳學究云）李山兒與孫孔目去了也。恐怕有失，還該差神行太保戴宗尾着他去，打探消息。我們方好接應他。（宋江云）這說的是。小僕儼，傳令與神行太保戴宗，着他星夜下山，打聽李山兒消息，疾來回報者。（卒子云）理會的。（宋江詩云）孫孔目要護臂燒香，李山兒怕惹事遭殃。因此上差神行太保，將消息早報取隄防。”